
Dear 鈍感男

micro幻滅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear 鈍感男

【Nコード】

N0420M

【作者名】

micro幻滅

【あらすじ】

朝は可愛い義妹に起こされ、ちよつとツンデレ気味の幼馴染と一緒に登校する。そんな誰もが夢見る生活が、今ここに！ある・・・
．．．のか？果たして鈍感男の本当の生活とはどんな物なのか！？

（前書き）

初めての短編小説です！

実際に「鈍感男」がいるなら、こんな感じなんだろうな、と思って書きました。

見苦しいですけど、宜しく願います！！

「．．．お．．．に．．．．お」

遠く、向こうから何かが聞こえる

その何かは、ゆっくりと意識を浮き彫りにしていくような声で、思わず聞き入ってしまった。

「．．おにい．．．．お．．い」

次第に声は大きくなり、耳の中を這いずるかのように、頭に入ってくる。

死者が蘇る時も、こんな感じの、甘い誘惑の音が聞こえるのかもしれない。

「おにい．．早く起きてよう．．．．送れちゃうよ」

ここまでではつきりと聞こえると、流石に起こされているのだと、分かった。

それでもこの布団は心地良いので、出たくない。
スマンが、寝させてもらうぞ！

「そんな固い決心しないでよ！？^{あかね}茜もそろそろ限界だからね！えいっ」

「うおっ！」

「ボタンっ」、と床に叩きつけられたせいで、眼が覚めてしまった。
相変わらず茜の力は強いな、と感心していると、横にもう一つの人影が見えた。

「若者らしく軟弱だな、海松^{みる}」

「褒め言葉？なら、嬉しいんだけど」

「生憎とけなしている。それよりさっさと着替えろ。学校に遅れるぞ」

朝の貴重な時間を奪ったのは、可愛い義妹の茜。

まだ中学生だけど、その朗らかな笑顔は見ている人を幸せにする。オレンジ色の髪が今日も綺麗だ。

もう一人は幼馴染の綾野 ミサ（あやの みさ）。小学生からの付き合いだ。

顔は良いし、外面もいい。黙っていれば、モデルにも見えなくもない位、可愛い。

しかし、中身は酷い。

つまらなきや蹴るし、人をパシリ扱いする。

「呆けていると、置いていくぞ」

「おにい、早くしてね！」

二人の誘いを適当に返して、俺はゆっくりと起きる。
これがいつもの日常だ……

）

「却下」

「何ですかあ！！自分で言うのもなんだけど、結構良い出来です

よ！」

「今時、こんなコテコテのラブコメが流行るかつつの。しかも何だ、この主人公の名前」

「え？ああ、『海松』ですね！名前は日本の色から取りました！紳士でもあり、ちょっとツンデレ！そんな皆に愛されている、斬新なキャラクターですよ！さらに」

「誰が嬉々と登場人物の説明をしると言った。幾ら思春期でも、ラブコメに自分の名前を使うな。ついでに、その設定、全然斬新じゃねえ」

「今までに無い主人公だと思ったんですけど！？」

「まあ、逆にここまで王道なのはいねえけどな・・・」

ここは某出版会社の待合部屋。

ちよつと狭いけど、俺の大好きなラノベで囲まれているかと思うとワクワクする。

ここで俺、八雲^{やくも}海松^{みる}はこの前書いた自信作を担当に見せている。

ラブコメを書き出して、早3年・・・一向にうまくならないけど、いつか俺の大好きなストーリーが色んな人に聞いてもらえる日を目指している！！

「ニヤニヤと壁を見つめるな。それより、もっとお前の個性を出せ。折角・・・いや、何でもない」

「折角何ですか？」

この世の中には、色々な文学が存在する。

そして、俺も色々書いてみたけど、結局ラブコメを中心に書いている。

俺は単純にラブコメの方が好きだから。
ツンデレにヤンデレ、天邪鬼に義妹．．．さらに夢の幼馴染。
全く、そんな生活を送ってみたいよな．．．

「まあ、それなら別に良い。今度こそ面白いのを書いて来い。話はそれからだ」

「そんな殺生な！！それでも人ですか、お局さま！」
「その名前と呼ぶな、ミル」

俺の前にいるのは編集長の長谷川 はせがわ 湊 みなと。
通称「お局さま」。

編集部で最も長く在籍していて、最も独身歴が長い。
常に男を探して、常に高飛車だから「お局さま」。
一応、女性で、37歳。

「迎えも来ているらしいから、とつとと出て行け」
「うげっ、また沙織 さおりと始良 あいらが来ているんですか．．．」

自動ドアを方を見ると、二人の姿があつた。

一つは紫色のツインテール。
背はそこまで高くないけど、バランスの取れているスタイル。
もう一つは赤い髪の子。

まだまだ幼いころの面影が顔に残っている。

「全く、ミルは懲りないね。才能無いのに、頑張るなんて」

「お兄様は無駄な努力をする傾向にありますね。そんなお兄様に「自重」という言葉を贈りましょう」

「攻めるんじゃないくて、優しく包み込んでくれる抱擁はないのか・

・まあ、良いや。お局さま、お疲れ様です」

「おう。今度はもっとマシな奴を書いて来い」

はあ、これだからお局さまの所に行くのは、抵抗があるんだよね。
とりあえず家に帰って、また書き直さないと。

「そう言えば沙織、お前今日も家で食べるのか」

「勿論だよ。始良ちゃんが作る料理って美味しいからね」

「お兄様は全然褒めて下さりませんけどね」

「当たり前だ。お前意図的に、俺の嫌いな物出すだろ」

「愛です。早く好き嫌いの無い人になつて欲しいので」

「ミルはまだ、ニンジン食べられないんだよね？」

はあ、本当にラブコメの主人公が羨ましいな。
俺もそんな生活を送りたいな・・・

）

「今の、海松君ですか」

「そうだな。ったく、相変わらず両手に花束を抱えているな」

「そうですね・・・ってか前から聞こうと思っていたんですけど、
何で海松君は自分がラブコメの主人公みたいな立場にいることを気づいていないんですか？」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「鈍感って罪だよな」

「
・
・
・
・
仰る通りですね
・
・
・
」

（後書き）

期待を裏切ったなら、土下座します。
ごめんなっ　　テヘッ

すみません、調子にのっていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0420m/>

Dear 鈍感男

2010年12月18日14時51分発行